

## あれ、クズ系男子かと思ったら……？ 特典 SS

### 【調子が狂う恋】

彼女から『今日会えませんか？』とメッセージがきたのは、部屋でだらだらとしていた日曜日の午後だった。思わず画面を二度見して、ふうと息を吐く。

「やっときた……」

ホテルであんなにお互いの相性を確かめ合ったのに、別れ際なんて頬を染めて俺を見ていたくせに、あの日から一週間彼女からの連絡はなし。

さすがに、と思ってこっちから連絡してみれば、彼女は友人の結婚式で地元に帰っていた。

いや別に、それならそれで俺に一言あっても良くないか？ ずっと待ってたのに。

そんな本音はひた隠しにして『じゃあ帰ってきたらまた会おうね』と返信したのが数日前。

「もちろん会うに決まってるし」

すぐに反応したら待ってたと思われるから、少し時間をあけてから返信する。

けれど、心はかなりはやっていた。

恋愛に関して執着はしない方だと思っていたけど、どうも彼女に対しては違う。

彼女のとぼけた笑顔が早く見たい。

\* \* \*

待ち合わせは出会ったホテルのあった駅。着いた時にはビル群の向こうの空はオレンジ色に染まっていた。

あのホテルにまた泊まてもいいな。

その前に食事か。そういえば彼女の好みはまだ知らない。

和食ならあの店、イタリアンならあの店……と検索をかけていると、彼女がやってきた。

会わなかった期間としては二週間もない。

けれど俺を見た途端ぱっとほころんだ顔を見て、どうしようもなく焦がれていたと実感した。

会いたかった。別れたその時からずっと、すぐにでもまた会いたかった。

恋愛なんて暇潰しだったけど、彼女はそう思えない。  
俺って案外、恋愛体質だったのかもしれない。

「すみません、呼び出したくせに遅れちゃって」

彼女が息を切らせてやってくる。俺のために走ってくるとか、ほんといいな。妙な満足感から笑顔になってしまう。

「いいよ。俺も今来たとこ」

「良かった！ 今日はありがとうございます！ あの、これ受け取ってください」

彼女は紙袋を俺に差し出した。受け取ってみると、ずっしりした重みがある。

「地元のおみやげです！」

お菓子とパンと漬物と地酒と……。彼女のセレクトしてくれたものは多岐に渡っていた。ちらりと中をのぞくとそれはもう色々なものがつまっている。

「いやこれ、買はずじゃない！？」

「おすすめしたいものがたくさんあったので、つい……」

えへへと照れ笑いする彼女を今すぐ抱きしめたい。

だってこれ全部俺のためなんでしょ？ 俺のこと考えて、喜んで欲しくて……ってやつでしょ？

こういうの、ほんっとやばい。うれしい。愛しい。抱きしめてキスしたい。今すぐホテル行きたい。

「……どうしましたか？ あ、ちょっと多すぎました……？ 苦手なものあったら抜いてください！ 持って帰るので！」

「ああいや、全然大丈夫。全部もらうよ。食べるの楽しみだなあ」

本当にありがと、と伝えると、彼女の笑顔がはじけた。  
あーもう、ほんとかわいい。素直は正義。間違いない。

「じゃあせっかくだし、このままごはん行こうか。何か食べたいものある？」  
「あ……すみません、今日はもう帰ります」

「え」

まさかの一言に俺はかたまった。彼女はなぜか真顔になっている。

え、なんで？ この流れは絶対ごはんでしょう。

「明日仕事ですし、おみやげ渡したかっただけなので」

賞味期限短いものもあったし……という言葉は右から左。

俺の頭の中は『？』でいっぱいだ。「ちょっと待って」と言ったものの、いつのまにか彼女はいつもの笑顔で「また連絡しますね！」と爽やかに言って俺に背を向けた。

「……おかしくね？」

吐き出した言葉は、まさに往生際の悪い男のそれだった。

いやでもそうでしょう。日曜の夕暮れに待ち合わせたのに、ほんのちょっと話してバイバイって……ないだろ、普通に。ありえない。

「……あーもうっ……」

とりあえず考えるのはあとまわし。俺は駆け出して、彼女が改札を抜ける前に手首をつかんで引き戻した。

「わっ……！」

不意打ちにバランスを崩した彼女を抱きかかえるようにして、改札から引き離す。柱の影まで移動したところで解放すると、彼女は目を白黒させていた。

「ごはん、食べよ。おごるから」

先回りして言うと、彼女はそういうことかという感じでうなずいた。俺が力づくで引き止めた理由はなんとか伝わったらしい。

「あ、いえ、全然私払います！ けど……」

「けど？」

それでもまだ彼女は戸惑っている——というか、嫌がってる？ なんで？  
さっきまでの俺に対する好意的なオーラはどこいった！？  
胸の中がざわつく。全然彼女の気持ちがわからない。

「なんか都合悪いことあるの」

あ、まずい。声に不機嫌が出てしまった。  
案の定、彼女の視線が不安げにさまよう。けれどすぐ俺に目を合わせて、申し訳なさそうに言った。

「その、今日はお泊まりできないの」  
「うん、明日会社があるからでしょ？」  
「はい……それだと、ほら、あれかなって」  
「あれ？」  
「坂上さんを満足させられないというか……」  
「あー、なるほど、そういうこと」

セックスできないからもう帰る、というわけか。  
いや確かにしたいけど、泊まりたいけど、ここで無理やり泊まろうとか言うのはかっこ悪い気がする。

「別にそんなのわかってるよ。俺、別に君とやりたいから会ってるわけじゃないから。前に言ったでしょ。『ごはんだけでもいいし』って」  
「そう、ですけど……」

いや、そこで疑いの目で見ないでくれる!? 俺のことなんだと思ってるんだよ。  
——やっぱり最初の印象って強いんだよなあ、ほんと。  
やれやれと思いつつ、俺は優しく微笑んだ。

「今日はごはんだけ食べて解散にすればいいんじゃない？ それでまた今度改めてお泊まりしようよ」  
「……はい」

彼女はほっとした様子でうなずいた。けれど、まだその表情に憂いが残っている気がする。

「……ん、まだ何か気になることある？」

彼女はさっき以上にもじもじした感じで口ごもった。

え、これ以上何があるんだ？ 全く予想がつかないから、俺も辛抱強く彼女の口が開くのを待つ。

じりじりとした沈黙の後で、彼女は観念したようにつぶやいた。

「……ごはんに行っちゃうと私の方が離れがなくなる気がして……」

「っ……！」

これはきた。やばい。反則。

いや俺だってそうなんだけど！？

絶対そうなるのわかってるけど、我慢しようと思ってたんだけど！？

——ここで二択。

ごはんに行った後、寂しそうな彼女をいなしてスマートに家に帰すか。

仕事の問題をなんとか解決して彼女の夜をいただくか。

「はー……君ってそういうとこあるよね」

「……どういうところです？」

「そういうかわいいこと言うなら……」

上目遣いで俺を見つめてくるのも、ほんとやばい。

素直は正義。認める。

ついでにもう一つ。

彼女の言葉や行動ひとつひとつに振り回されてる。これも認める。

俺はもう一度手を伸ばして、彼女の肩を抱いた。耳元に顔を寄せて、そっと一言。

「ごはんより先に、君のこと食べていい？」

瞬間的に彼女の顔が真っ赤になった。

これだ、第三の選択肢。これしかない。

思いつきでこぼれた言葉を実行すべく、俺は彼女に満面の笑みを向けた。